

桜蔭俳話会 六月句会(第二九六回) 桜蔭会館

平成二十三年六月二十六日

- 3点②青葉潮世界遺産の島洗ふ 守  
3点①先見えぬ事故原発や驟雨来る 守  
3点①あかときの風の回廊大夏野 守  
2点①伝わらぬ言葉のみこみ沙羅の花 幸  
2点 ボール呼びネットへ蹴りて遠青嶺 貞勝  
菜食の身かろやかに更衣 貞勝  
口軽きおのれ厭はず水羊羹 秀一  
女子比率高き母校よ百合の花 守  
1点①青梅の太るつもりや風重し 秀一  
1点①牡丹の日光月光菩薩かな 貞勝  
1点 学園祭の喧噪泰山木咲けり 友子  
刈りし草青山となる社宅かな 秀一  
夏燕駅舎にふんの注意書 溪水  
放水に新緑ドドツとなだれこむ 幸  
耳襲う蚊を叩きてまま掃き始む 佳史  
更衣狂ひし地球の気象かな 溪水  
ヘッデングに汗振りきつて玉を狩り 貞勝  
かたくなに十薬石の隙間より 佳史  
珈琲に替へて新茶よ今朝の閑 友子  
炉の芯の熱収まらず氷水 守  
菩提樹のほのかな香り塔の町 ヤエ子  
弾けたるダンスの女子等五月晴れ 友子  
青光り瞬間消えし子の蜥蜴 佳史  
夏シャツの湯上がり気分宙あゆむ 眞三

※ 耕耘機の軌跡のありし麦の秋 ヤエ子

- 梅雨晴間気分満ちきしうたた寝湯 眞三  
杉木立旧宮邸に雨蛙 幸  
青嵐巨木となりし泰山木 溪水  
こはごはと歩き初む児や夏帽子 友子  
黴くさき匂ばかり浮ぶ家居かな 秀一  
子燕の育ちざかりや押し合うて 幸  
梅雨寒や宅配便の大声 秀一  
糸杉の連なりし道夏日影 ヤエ子

万緑に生れ代りて山新た 溪水

オリーブの葉銀色放つ夏の朝 ヤエ子

紫陽花の品よく丸きむれなりし 眞三

麦秋の丘なだらかにベージュ色 ヤエ子

妻と見る夏の草花朝餉前 眞三

万歩計半里の木橋に夏鶯 幸

紫陽花や雨にほだされ毬を増す 貞勝

首上げて出合ひし蛇やぞっとする 眞三

どくだみは十二の使徒か花白し 佳史

おおとろの鮓最高として家族連れ 佳史

社への山道迷ふ蛇いちご 友子

くりやよりも蚊がでたわと妻の声 溪水

不在投句 (瀬戸溪水、野上貞勝)